

NWEC（国立女性教育会館）男女共同参画推進フォーラム参加報告 CSW インターン企画「今、『結婚』を考えるー女性と『結婚』のこれまでとこれから」

日本 BPW 連合会ヤング委員長 ニノ宮 寛子

日本 BPW 連合会ヤング会員 津久井 瞳

国連女性の地位委員会（UN-CSW）に派遣されたインターンが帰国後、国内で取り組むイベントの一つに NWEC フォーラムでのインターン企画があり、例年 EPD のポスター展示と共に行なっている。しかし、前年度は NY への渡航も会議への参加も叶わず、同じメンバーが 2021 年度のインターンとしてオンラインで参加した。そのため、2021 年度は少し趣向を変え、2020 年度と 2021 年度（CSW64・65 インターン）のメンバーの 1 人である津久井瞳会員（個人会員 修士課程 1 年生 ジェンダー論）が企画をし、全国の BPW 全会員を対象に「結婚」に関するアンケートを行い、それを元に、アンケート結果の解説と分析をし、さまざまな背景と考えを持つ会員とオンライン座談会を開催した。この様子を撮影した後に、座談会の参加者と共に提言をまとめ、その部分も動画の最後に付け加えて動画配信をした。

◆概要

1. 実施日時：2021 年 12 月 1 日（水）～21 日（火）
2. 様式：動画配信（撮影は 11 月 14 日に実施）
3. 出演者：（ ）は所属クラブ

ファシリテーター 津久井瞳

スピーカー 岸本京子（神戸）、木村麻子（神戸）、
工藤遥（札幌）、田代早苗（東京）、
林乙羽（東京）、細井陽子（北九州）

3. テーマ「今、『結婚』を考える
ー女性と『結婚』のこれまでとこれから」

4. 参加人数 239 名（NWEC によるのべ閲覧数）
5. プログラム（全 100 分）

◇企画者の結婚への問題意識

◇アンケート結果報告①+コメント（結婚の意向）

◇アンケート結果報告②+コメント（改姓について
の意識）

◇アンケート結果報告③+コ
メント（結婚にまつわる規
範・役割）

◇アンケート結果報告④+コ
メント（結婚をより自由で
平等なものにするために）

◇座談会のまとめと提言の
披露



◆報告

企画運営者・座談会ファシリテーター 津久井瞳

【問題意識】

大学に入ってジェンダーについて多くのことを学ぶ反面、周囲からの結婚に関する言動などで窮屈に感じた。それを発端に結婚とはそもそも何だろうと考えるようになった。アンケート（全会員 285 名を対象とし

回収率 約 35%。結婚の形態、旧姓使用や改姓について、結婚や子どもを持つことに関する規範や慣習についての考え方などを調査）を元にさまざまな年代や結婚の形態の人々との座談会を開くことにした。

【アンケート結果】

①結婚の意向

回答者のうち法律婚が 74.4%、事実婚 5.1%、未婚 20.5%。法律婚、事実婚共にその選択が希望通りという人が半数以上で、理由は多岐にわたった。自分やパートナーの同意によるものという回答が多かった一方、配偶者ビザなどの制度上の問題、「適齢期規範」などの年齢との関係、家族との関係を挙げるコメントもあった。未婚の場合は結婚自体を「あまり考えていない」という人が多数（6 割）を占めた。結婚を「したい」理由として、「家族が欲しいから」、「したくない」理由として「家族の面倒を見ることになるから」などという回答があった。「あまり考えていない」理由には、パートナーとの価値観の相違や、結婚をしていないという現状に問題を感じていないことが挙げられた。

②改姓について

改姓をしたことが「希望通り」と回答した人が 65.5%。50代と60代を中心に「変えるのが当たり前だと思っていた」という理由が目立った。30代から50代は「職業上改姓したことが不便であった」という回答があった。旧姓使用ができなかった職場もあったとのこと。未婚の人への「結婚したら姓を変えようと思うか」という質問へは、「いいえ」と「決めていない」が半々で、「はい」と回答した人はいなかった。

③結婚にまつわる規範・役割

法律婚をした人で、規範や役割を「強く感じる」と回答した人が 22.4%、「感じる」が半数、「感じない」と答えた人が約 25%ほどであった。回答の例として

「夫の家族から感じる」「習い事の送迎を母親しかしていない」「家事の負担を感じる」「嫁の意識が自分に内面化されている」等があった。今回の調査は、回答者の年代に偏りがあるものの、若い年代ほど規範や役割が緩まるという傾向は見られなかった。どの年代でも規範や役割を感じる人・感じない人で分かれていた。事実婚の場合には、「感じる」と「あまり感じない」で半々であるが、「嫁としてのつとめを求める圧力を感じることもある」、未婚の場合には、結婚していないことに関して、56.3%の人が規範や役割を「強く感じる」または「感じる」と回答した。「何か問題がある人なのではと思われる」「常識に反しているように評価された」「40歳を過ぎたら何も言われなくなった」というさまざまな意見があった。

④結婚をより自由で平等なものにするために

アンケート回答者の全体で、以前より結婚が「自由になった」と答えた割合が32.1%で、「やや自由になった」が51.3%だった。反面、「ほとんど変わっていない」は15.4%だった。

【座談会での出演者からのコメント】

- 圧力を感じる事が20代の自分にもある。年代を超えて同じような経験をしていることが興味深いので、世代間のコミュニケーションを考えていきたい。
- 姓を変えたかった人も変えたくなかった人も、改姓を当たり前だと思っていた人も、これから結婚したら変えたくないという人もいる。姓はアイデンティティのひとつであり、職業上改姓をすると、同一人物であることさえ分かりにくくなる。このように姓を変えることには葛藤があることが分かった。現在は旧姓使用の人々が増えており、その利点を指摘する声もある。そんな事例が増えて「当たり前」が減ること、同時に多様性のある社会のためにも同姓か別姓かの選択肢がつけられることが重要ではないか。
- 家族や友人だからこそ「なぜ結婚しないの」「嫁の貰い手がないよ」といった様に、フランクに言われることがある。恋愛のゴールとして自明的に結婚が位置づけられる感じはまだある。結婚して世界が広がるという利点はある一方で、「結婚したら一人前」という感覚は乗り越えるべき課題。また結婚後の役割について、育児と介護は夫婦の両方でも一方でも負担がある。ケアを性別に関わらず分配し、また社会化していくことが必要だと思う。このような「結婚したらこうしなければ」と考える「当たり前」は自分の中にあるアンコンシャス・バイアスでもある。幼少期からの環境によって形成されるが、周囲を見渡すと気づく、おかしな「当たり前」もある。

【出演者からの提言】

林—『幸せな人生』のバロメーターは「適齢期」に「法律婚」をすることに限られない。多様性に富んでいる事を社会全体で理解しよう。現在の制度はとても限定的だが、多様性のあるものに変わるよう皆で話し合える社会をつくろう。

工藤—誰かの結婚についてとやかく言うのは人権侵害だという認識を持つ。個人の生き方の多様性を認め、互いに尊重し、差別しない社会になれば、もっと多くの人が幸せに暮らせるはず。

木村—人が幸福を追求することを支援する制度と社会的価値観となるよう行動する。旅券の表記や単身赴任の帰省費用など行政支援が充実しつつあるところも周知して必要とする人々が利用するようになって欲しい。現代の働き方や家族のあり方など個人が追求する多様な幸福を支援する社会であるために制度と価値観を両輪で少しずつ検討していく必要があると思う。

田代—「結婚」は人の生き方を左右しうる、ライフイベント。誰もが生まれた性別や属性を理由に差別されず、憲法で保障された基本的人権を尊重され、自ら選択できる社会を、教育と差別意識の克服で、みんなで実現しよう。

細井—結婚や選択的夫婦別姓制度に関する両極の意見の間にはグラデーションがある。分断が起きないように守旧派もリベラルも対話できるようなコミュニケーションの場を設けよう。

岸本—政策決定の場へクオータ制度の導入を。

津久井—それぞれの生き方が尊重される社会に向けて、世代や性別、立場の垣根を超えてみんなで話し合おう。その積み重ねを諦めずに続けていく!

【企画運営を終えて】

本企画は、選択的夫婦別姓や同性婚の議論が盛り上がるなか、結婚をより自由で平等なものにするためにアクションを起こしたいと考え実行した。アンケートでの声や座談会出演者の話から、当初私が想定した以上にいろいろな立場や経験（法律婚・事実婚の別や姓の選択、子どもの有無[希望していたかどうかも含めて]など）があると学んだ。同時に、多様な違いを越えて繋がり合えることも、今回の大きな学びであった。本企画運営にさまざまな形で協力ならびに参加の会員に感謝している。